

議案第47号

倉敷市指定重要文化財の諮問について

このことについて、次のとおり議決を求める。

令和4年12月1日提出

倉敷市教育委員会

教育長 井 上 正 義

指定を諮問する文化財

- | | | |
|---|-----------|--|
| 1 | 名 称 | 絹本著色仏涅槃図（藤戸寺） |
| 2 | 種 類 | 絵画 |
| 3 | 員 数 | 1 幅 |
| 4 | 所 在 の 場 所 | 倉敷市藤戸町藤戸57 |
| 5 | 所有者の氏名 | 宗教法人 藤戸寺 代表役員 北村増紹 |
| | 及び住所 | 倉敷市藤戸町藤戸57 |
| 6 | 内 容 | 絹本著色 |
| | 寸法 | 本紙 縦164.5cm 横121.3cm |
| 7 | 制作の年代 | 室町時代前期 |
| | 又は時代 | |
| 8 | 指定の理由 | <p>仏涅槃図は臨終の釈迦を囲んで、仏弟子など多くの人びとや動物たちが嘆き悲しんでいる情景を描いたものである。</p> <p>本作品は中国宋代の絵画の影響を受けながらも古様を取り入れた折衷様式の涅槃図であり、室町時代前期の作と考えられる。</p> <p>近世の涅槃図には見られない生き生きとした描線で描かれており、市内屈指の涅槃図の一つと考えられることから、倉敷市の重要文化財に指定して長く保存していくべき絵画であるとする。</p> |

倉敷市文化財調査

2021 年 11 月 30 日 上蘭四郎、中田利枝子現地調査

2022 年 8 月 5 日 上蘭四郎作成

種 別：美術工芸品・絵画

名 称：絹本着色涅槃図

員 数：一幅

所在地：倉敷市藤戸町藤戸 57 藤戸寺

所有者：宗教法人藤戸寺 住職 北村増紹

〔寸法〕 縦 164.5×横 121.3 cm

表具幅 縦 245.0×149.2 cm 軸幅 157.7 cm

絹幅（横に三連） 左より 38.4、44.2、38.3 cm

〔概要〕

『備前藤戸寺誌』（昭和 6 年 5 月刊行）に、安永 8 年（1779）に普賢院より藤戸寺が譲り受けた旨が記される涅槃図。

縦長の画面のやや下方の中央に、釈迦が右手枕して、右腋を下に両膝を曲げ、両足先を上下に揃えて寝台（宝台）に横たわる。寝台は釈迦を頭の方からみた形、すなわち、向かって左側面を見せる形式で描かれる。寝台の左に菩薩や仏弟子など 16 体、寝台の後ろに仏弟子や天部など 21 体、寝台の右に菩薩や天部など 8 体、寝台の前には悲嘆のあまりひれ伏す阿難とそれに水をかける阿那律などの仏弟子、悶絶する仁王や俗人など 15 体、都合約 50 体（剥落など損傷が激しいため若干前後する）の会衆が動的に描かれる。摩耶夫人と翳を捧げる侍女など一行 4 体はいずれも立像で、阿那律（剥落、一部残存）に先導されて画面左上から飛来する。2 月 15 日の満月は、画面中央上に描かれる。沙羅双樹は、寝台左に 2 本、後に 2 本、右に 2 本、前右寄りに 2 本の四双が高く配され、すべての葉が白変し、枕もとの一本の沙羅双樹に釈迦の錫杖と鉢を包んだ袋を下げる。沙羅双樹の背後には湧雲と跋提河（熙連河）が描かれる。また参集する動物は、画面左より鳳凰、ワシ、白鳥、サル、小鳥、水牛、ゾウ、シシ、ウマ、トラ、シカ、キリン、イヌ、ウサギなど十数種約 20 体（損傷が激しいため詳細は不明）が描かれる。

以上、本図の釈迦の姿勢、寝台の向き、沙羅双樹の高さ、会衆の人数の多さと動的な表現、動物の種類の多さ、摩耶夫人の描写などから、鎌倉時代以降に、中国の宋画の影響により登場する、いわゆる第二形式の涅槃図といえる。

なお、画面の上部と下部の損傷が激しく、修復はなされているが、図様の詳細については確認できない箇所がある。個々の着彩についても後補の箇所が認められ、釈迦の肉身の肌色、

着衣の朱や切金についても後補の可能性はある。

〔所見〕

第二形式の涅槃図としては、画面全体に対して寝台と釈迦の姿が大きく描かれ、長方形の形態であるが、復古的な構成となっている。会衆の人数は比較的多いが、個々の慟哭する表情は抑制され、また姿態も含めた表現は菩薩、仏弟子、天部、俗人それぞれの個性を繊細に破綻なく表現しており、涅槃の臨場感を厳かに高めている。また、参集する動物たちの種類も少なく、画面全体に対して小さく描かれている。これらの点においても、古様を認める。

ただし、画面上部の湧雲や跋堤河の動勢が激しく、厳肅な趣はややそがれている。また、本来は釈迦足元の菩提樹の葉のみが白変する図様であるのに、すべての菩提樹の葉が白変（一部後補の可能性あり）しており、図様の崩れが生じている。さらに、第二形式にしばしば登場する、釈迦足元の仏弟子迦葉や毘舍離城の老女が描かれておらず、この点においても図様の変容が認められる。

本図の図様の特性として、摩耶夫人一行が、通常の右上からではなく、左上から飛来している点がある。これは、鎌倉時代の阿弥陀聖衆来迎図の迅速来迎の形態を涅槃図に受容したもので、第二形式に付加された新たな図様である。

つまり、本図に見られる様々な図様と表現の特性は、浄土教典的理解にもとづく来世信仰による第一形式の涅槃図から、涅槃經典的理解による釈迦信仰による第二形式の涅槃図への転換が図られ、そこへ宋元画的な絵画手法が導入され、一定の年月を経過して現れたと認識される。

以上、本図の図様と表現は、第二様式にもとづきながらも古様を摂取した、いわば折衷様式の涅槃図といえる。同様な図柄は南北朝時代から登場し、室町時代に一つの形式として展開したように思える。本図と比較的近い作例として、笠岡市の三宝院、持宝院の涅槃図（いずれも室町時代中期）があり、真言宗系寺院における図様の拡がりも考慮される。現在のところ、室町時代初期の制作と推定する。

なお、本図の内容と明恵上人の四座講式との関係、また備前から備後に多く所在する八相涅槃図の図像との比較検証は、今後の課題として付記しておく。



絹本着色涅槃図 藤戸寺